

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

# 思春期なアダム外伝

いけないの マキナ先生!

さかき傘

表紙 / 天海雪乃

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『思春期なアダム外伝 いけないっ マキナ先生!』  
に基づいて作成しております。

※本作はあとみっく文庫『思春期なアダム1～6』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



**思春期なアダム外伝**  
**いけないっ マキナ先生!**

さかき傘  
表紙 / 天海雪乃

## 登場人物紹介

### Characters

---

い べくさ

#### 伊部草マキナ

あらゆる女を狂わせる“蛇眼”の力を監視する秘密組織『FeTUS』の少女。普段は無感情に振る舞っているが、睦月とふれあうことで、エッチにも積極的になっていく。

ふじたむつき

#### 藤田睦月

一見普通の少年だが、右目に“蛇眼”の力を秘めているため、現在は天使側の少女、エンジュやミカとともに同居、監視されている。

「今回のテストは、クラス平均58、全体平均62点であり芳しくなかった。赤点対象者は31点未満。補習があるので週末あけておくように。以上」

必要事項を簡潔に告げ、勝江先生の合図が響く。起立、礼で帰りのSPは終わった。生徒らはみな返却されたテスト用紙に苦い顔である。言われた通り、全体的にいまひとつの出来だったようだ。

「……………」

喧騒からひとり外れているのは、クラスでも無口で有名な伊部草マキナ。

彼女にとって、こうした定期テストはさしたる意味を持たなかった。FETUS上層員としてこの程度の問題なら満点を取るだけの知識はあるが、彼女がここにいるのは「一般的学生として藤田睦月を監視する」ため。ゆえに、むしろ目立たないよう問題傾向から平均点を計算し、その範囲に収めるように努めている。

ちなみに今回は、

(63点。まあまあ)

満足して答案をしまった。

彼女が気にかけるのは、自分の点数よりむしろ、ここにいる理由たちの成果。藤田睦月をはじめとする観察対象たちの出来であり、

「つたく！ テストテストって、だから人間界はキラいななのよ！」

後ろの席の女子が、苛立たしげに大声でがなる。

(観察対象乙、地遊尼エンジユ。本試験での成績は芳しくない模様)  
静かに動向を見守った。

「だいたいなんで勉強なんか……人間界の数理法則なんて知らないわよ」

(乙ら天使の属する天界とは、根底常識が異なることが原因と考えられる。この結果から知力量を測ることは不可能。しかし不機嫌になっっていることから、少なくとも勉強は好んではないかと推察される。随時観察を続行)

隣の席へも聞き耳を立てる。

「あーあ、こんなのちつとも面白くない」

「そうなの？ ……うわっ、でも100点って、すごいじゃないルシア君」

「とりあえず全部正解書いたけど、なんにも面白いことないや。そうだ、次からは睦月クンと一緒に答えにして、点数おそろいにしよつと」

「……それ僕すぐく恥ずかしいんだけど」

そこでは男子が二人。答案を見せあっていた。

(観察対象甲、藤田睦月。観察対象丙、里輪ルシア)

とくに前者は最重要監視対象である。無言のまま、会話内容に集中する。

(丙は学績好調。ただし不正行為の有無は不明。また次期試験において不自然な点数動向

を示す兆候あり。悪魔である自身の特異性を隠匿する必然性は、感じていない模様

「睦月クンはどうだった？」

「僕？ あはは、今回ちよつと調子悪いかな」

（藤田く……、甲は）

目線は窓の外へ向けて、聞き耳を立てていると悟られないようにしてきたが。そこでちらつと、一瞬だけ隣の彼らを見た。

睦月は気づかず、照れくさそうに苦笑しながら。

「……38点。赤点ギリギリ」

### 《内閣機密調査局・A機関》

「以上。報告を終わる」

「赤点ギリギリだとお!? どうしたことだ教育委員会！ 少年はこれまで平均点を割るような点数は取らなかつたはずだぞ！」

「天使、魔族、FETUSの干渉が、少年の学業に与えた影響は甚大のようですね」

「成績自体は問題じゃないが、少年に負担をかけとるつちゅう意味では問題だでな」

「学校はなにをしようなんだ！ 教育委員会、至急学園の試験体制を調査しろ！」

「ガハハハ！ 結構結構、若いうちは勉強より経験ぜよ！」

「ととつ、と、とにかく、結論は次回の結果を見てからということだ」

「彼へのマイナス干渉は我々の責任になるでな。まあ諸外国からつつつかれるでな」

「みな、落ち着け」

「落ち着いてられるか！ だいたいバカ教師が多いからこうなるんだ！ 教育委員会！

全国の教師の給料を一律二割さつびけ！」

「私立校で起こったことを公立職員にケチつけてどうするでな」

「あまり何度も地方公務員をスケープゴートにすると、いずれマスコミが手のひらを返しますよ」

「ととつ、と、とにかく、結論は次回の結果を見てからということだ」

「……話しあいにならない」

《国連機密委員会 セクションA》

「以上。報告を終わる」

「H A H A！ ファッキンジャップが少年の環境整理にまたしくじったってことかい！」

「アイヤー、これだから小国には任せられんアル」

「おお神よ！ この困難に打ち勝つ力を与えたまえ！」

「ととつ、と、とにかく、結論は次回の結果を見てからということだ」

「ここはやはり彼へのインターフェアを改めるべきでしょう。いかがかな、グレートな我が国の誇る、グレートな教育チームなら」

「H A H A H A ! 日曜の牧師がまた寝ぼけたこと言ってやがる。そのドタマに風穴ブチあけられたくなけりや、ペラペラうるさいお口にチャックしてな！」

「アイヤー。方針を変えるなら我らのような大国を無視すべきじゃないネ」

「ハレルーヤ！ やはり神の意思に従うべきではないだろうか！」

「相変わらず米屋は品がない。おい君、午後のティーを淹れてくれたまえ」

「ととつ、と、とにかく、結論は次回の結果を見てからということだ」

「……みな、頼むから落ち着け」

「サー！ 祖国に伝達すれば、2分以内に教育部隊を召集、編成して出撃できます！」

「男の話は飽きたなあ。それより今朝会った、セクシーな美女の話でもしないかい」

「頭いてえ。ウオッカの飲みすぎだ。酔い覚ましにバーボンをくれ」

「何事も諸行無常。なるようになります」

「ちよいと。この席順はなんザマス!? 男ばかりが上座について、女性の人權問題については協議採択が済んでいるはずじゃ」

「ととつ、と、とにかく、結論は次回の結果を見てからということだ」

「……………はあ」

「と、いうわけで」

翌土曜。

マキナは睦月のマンションへやってきていた。

彼女の属するFETUSと、彼を保護する天使たちは敵対関係にあるため、訪れるとエンジュは露骨に嫌な顔をするが、今日の彼女は赤点補習。いるのはお互いにデタントの向きを重視し友好的に接してくる保護者、ミカだけ。

テーブルを挟み、二人と向かいあって座る。

「前回の試験結果について、天使、魔族、そして私たちの干渉が藤田君に及ぼした影響への困惑が世界中に広がっている。このままでは予期せぬ危険を生む可能性がある」

「なるほどねえ」

「……世界中？　なんで僕のテストが世界中に？」

「私自身も心配している。私たちが現れたことで藤田君に与えたストレスが、こちらの想定以上に強いのではないかと」

ジッと見つめる。

睦月は頬を赤らめ、

「そんな、ストレスだなんて。たしかに最初は戸惑ったけど、でも僕は」

「このまま成績が下がり続けると――」

赤点 ↓ 留年 ↓ 退学 ↓ 社会に出られない ↓ 自殺

――非常に危険――

「ありえませんか」

「そこで」

淹れてくれたお茶をどけ、持ってきたバッグをテーブルに置いた。中には教科書ノート一式と数枚のプリント、その他もろもろが詰まっている。

「藤田君に勉強を教えようと思う」

「家庭教師ってこと？」

「Positive. できれば、邪魔の入らない環境で」

首を縦にふる。

成り行きを見ていたミカは、手にしたビールの缶をちゃぷちゃぷ言わせながら、ジッとこちらを見つめてきた。

緊張感がないような、どこまでも見透かしてくるような、底の読めない視線だ。逃げず真っ向から見つめ返すマキナだが、胸がどきどきする。

「でもねえ、いちおう私たちとあなたは敵対関係にあるわけで。そう簡単に最重要保護対象者を引きわたすわけには」

「近くのホテルで世界のワイン試飲会がある。私ならば、招待客にしてあげられる」

「OK。睦月君すっかり勉強しなさいね」

席を立った。手にしたビールを片付けて、外出の準備を始めるミカ。

まだ戸惑っている様子ながら、勉強を教えてもらうのは助かると睦月も同じく腰をあげた。全員の利害が一致したようだ。マキナはFETUSに電話を入れて、ホテルへ一名のゲストを招くよう手配させる。

と、

「ところでマキナちゃん」

準備のため部屋にひっこむ睦月を見ながら、下世話にほくそ笑んだミカが。

「これから貴女、邪魔の入らない環境で、睦月君と二人きりになるわけだけど」

「？それがなにか」

「家庭教師ってどういうことするか、知ってる？」

## ▲ 1時限目 英語 ▼

「なんでミカさんの服きてるの？」

ミカが出て行き、二人きりになって、さっそく勉強を始めることに。

さつきまで見慣れた制服姿だったのに。なぜか着替えて部屋に入ってきた彼女に、睦月は硬直してしまふ。

驚くのも無理はない。前が大胆に開いたヘソだしのシャツ。黒いソックスはいつものおとなしい無地ながら、マイクロミニのチュールブスカートで、大胆に脚を見せている。

しばらくあつけに取られ、あわてて目をそらした。同居人のお姉さんがよく着ているものだが、クラスメイトが相手だと、まったく別のものを見た気がする。

マキナはそんな少年の反応に、

「脈拍の上昇を確認。地遊ニミカの指摘は正しかった模様」

「はい？」

「彼女に教えられた。世の一般的な女性家庭教師は、こうした格好で接することで生徒の血液循環を高め、脳を活性化させるものだと」

「……………」

「正当性を確認。状況を続行する。……少し恥ずかしいけれど」

ほんのり頬を赤くしている彼女に、ため息をつく少年。どうやら、あのイタズラなお姉さんに乗せられたようだ。

「あのね伊部草さん。それは」

「時間は限られている。私への疑問は分かるが、早く授業に移りたい」

「ひゃんっ」

インクの広がりには比例して理性の風穴も広がる。我慢できずに睦月は、お尻へと顔をダイブさせた。

谷間へぐいぐい鼻先をねじこみ、鼻から、口から思いきり息を吸う。薔薇のアロマの原液のような。一晚中くすぶらせた麝香のような。……他にたとえようのない、伊部草マキナのお尻のニオイをむさぼりつくす。

ニオイは深い部分へ行けば、もっと強く漂っているのは知っている。生地一枚を通してお尻の穴の真上まで鼻先を持つていった。

「だめ、あっ、あの、だから……」

なにをされているか察して、マキナはしきりに恥じらう。けれどペン先という極小の圧点で粘膜をいじられ、お尻には荒い鼻息を送り込まれて。力が抜けてしまいうらしい。できるのはくいくい腰を右へ左へさせることだけだった。揺れるヒップの肉が、顔とこすれて、彼を喜ばせるだけだ。

「はふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふうう……っ」

「んくっ、うっ、ううううっ、うっ、うっ……」

似たような呼吸を放ち、限界まで来た淫らな気分を身を悶えさせる二人。

(ああもう……、この匂いエッチすぎだよ。……で、でも)

パンツの中で下世話なものが痛いくらい硬くなってしまい、睦月はズボンを引っ張って、ポジショニングを整えた。けれどもうそこは、どこへ持っていても収まりが悪いサイズまで膨張している。

(ある意味生殺しかも、これ)

同時に、匂いだけでは直の刺激を得られない切なさ、不満そうにもしていた。

そしてそんな、贅沢な悩みに苦しむ少年は、

(け、計算外の事態だが、心拍数はさらに上昇。この状態を維持して勉強してもらえば非常に効率的。……でも)

マキナも同じように、切なそうな顔をしているのには気づかなかった。

(……だめ。もっと嗅いで欲しいなんて思っては、だめ)

### ^ 3時限目 国語 ^

まだ少しぼーっとした様子で、次の授業の準備にかかるマキナ。

(じ、若干の計算違いはあれ、彼が勉強に夢中になっているのは確か。地遊尼ミカの指摘に間違いはない模様)

ちらりと見ると、彼は血走った目で勉強机に向かっている。やや前かがみになっている

のも学習意欲の表れだろう。

(失態の原因はわたし。気を引き締めなければ)

お尻を気にしながら思った。荒い鼻息に舐められ、ペン先で散々イジメられた中身が、さつきからムズムズして仕方ない。

こつそりと痒い部分を撫でながら、国語の用意をしていった。

「藤田君は漢字の読み書き。とくに読みには非常に強い。しかし読解力の必要な問題が全体の点数を下げている」

「うん。自分でも気づいてた」

「読解力はとても大切。読解力がない人間になると――」

強盗に襲われたとき要求が分からない ↓ 強盗「ちくしょうめ！」 ↓ 刺殺

――となる。危険」

「そのパターン飽きない？」

「読解力とはとにかく本を読んで、場面を想像することで伸びる」

バッグから本を一冊取り出し、ページを開いて渡した。

「読んで。その場面を私と再現してみる。人物の心理を掴みやすいはず」

「なるほど。分かった、やってみるよ」

英語と同じく、勉強内容自体はマジメなので従う睦月。指定されたページに目を通す。

「なにになに。『男は小さくため息をつくと、いつもの癖で鼻の頭をかいいた』」

「……………」

「『照れくさそうな男の態度に誘われ、しなだれかかっていた女は、ベルトをひいて男の下肢をむきだしにさせ』…………えっちくない？」

「地遊尼ミカの提案。本当はトルストイにするつもりだったけれど、官能小説のほうが心情より状態描写に重きを置いていて、再現しやすい」

「…………あの人はまったたくもう」

「えっと、…………まずは、あの、ベッドに」

「了解」

言われた通り、ベッドに寝そべるマキナ。短いスカートの中が見えそうになり、睦月はあわてて頭側に回った。

「不正解。その後の描写を読んで。男は腰を下ろして、女の肘に触れたとある。よって移動するなら側面が正解」

「わ、分かってるよ」

側面に戻って腰を下ろす。いそいそと手のひらを伝わせていき、肘に触れてみた。

「ここで問題。次の行で男は、また鼻の頭をかく。このとき男はどう思っているか」

「え？ んっと、あの、気恥ずかしい？」

「正解。先ほど鼻をかくのは男の癖と明示されていた。これは男が、恥ずかしさをごまかす仕草であると推察できる」

そこまで読みとらなくても、いまの自分の気持ちを言っただけなのだが。うぶな少年は顔を真っ赤にしながらか続きを読みすすめる。

「つ……。あの、次、二人とも裸になるって書いてあるけど」

「じ、状態さえ終えればいいので、もう脱いだことに。その次は」

「脱がしたあとは……、えっと、抱きしめる」

「それならば自然」

両手を差し伸べるマキナ。睦月は照れくさそうにしながらも、もっと恥ずかしいことはしたあとだと自分も寝転び、華奢な身体に両手を絡めた。

「っう……」

一方の少女は、そこで重大なミスに気づく。

(いけ……ない。抱擁されると、おかしい気持ちに)

きつく、きつく背中を抱かれると、頭の中が霞みがかってしまふのだ。それもポーっとする程度のものでなく、理性がぼやけるくらい濃い霧が。

(つ、またはも計算外。藤田君の匂い……気持がいい)

顎が外れそうなディーブキスや、ショーツ一枚通して大事なところへされたイタズラとはまたちがう。身体の芯がクラゲにでもなつてしまったかのような脱力感。そうして不安定になった自分をたくましい腕に抱いてもらう安心感。どちらもクラクラするくらい甘く、もうかなりダメージをうけている少女の理性を襲う。

小説にそんな描写はなかったけれど、無意識のうちに腹部へ絡む体温高めな腕に、肌をこすりつけてしまった。

(ふ、藤田君がいけない。こんなに温かくて、いい匂いだから、だから……)

「伊部草さん？」

「っ！ ……なに」

「いや、次、伊部草さんの番」

「ごめんなさい」

こっさり匂いを嗅がせてもらった胸板から顔をあげる。

快美に痺れつつある頭に活を入れ、なんとか続きの展開を思い出した。顔を近づけていきそつと頬擦りする。

「ん……」

頬と頬がぶつかり、はずみ、こすれる触感に、ウツトリ目を細めながら、

「も、問題。女はこのとき、どうして男に頬擦りしたか」

ごまかしがてらに少し鼻にかかった声で言った。

睦月は「そうだなあ」としばらく考え、やがて顔を離すと、隙だらけな唇を奪う。

「ンう……。くっつ、くっ……。！」

舌は使わない、けれど強く吸いつくような強引な口付けだった。

気分が蕩けきっていたマキナには、これ以上ないくらいのとどめとなる。ジインと強烈な閃光が頭ではじけ、抱かれたままの肢体がバウンドを起こした。連動した乳房がいかにも重たそうにぶるんとはずむ。

睦月はそんな少女の反応を、愛しげに抱きながらうけとめ、収まるのを待つて。

「こういうこととして欲しかったから？」

「せ、正解。……でもちがう。男は実行していない」

「ごめん」

イタズラつぽく微笑んで、少年はさらに抱きしめる力を強めた。

(う……。お、追い討ちは、反則)

軽いオルガスムスに加えて抱擁まで強められて、さらに蕩かされてしまうマキナ。睦月はやはりアドリブで、耳へ息をふきかけたり、髪を撫でたりしてくる。

「あうっ！」

ぎゅつと乳房をわしづかみにされた。

本の通りの展開だ。マキナは文句をいえない。けれど……。

——むぎゅ、むぎゅ。にゅぐにゅぐ、こりこりこりこり……。

「っは、あ、あの。……ンはある」

本には『挿んだ』程度の表現しかないのに、本格的に乳房を揉みしだいてきた。ミルクを絞るようにたっぷりな体積を根元からしごいたり、かと思えば押しつぶしたり。充血して服の上からも位置の分かる乳頭など、ことさらいやらしくなぞる。

「うっ、うう……」

抱擁でけだるくされたとき、全身が性感帯に作り変えられていたのか。揉まれているのはバストだけなのに身体中が気持ちよくなっていく。少女はゆっくり失神していくような気分で、目に涙を浮かべ、わずかに湿る下唇を噛み締めた。

「もっ、問題……。このとき男は……。っふ、ひあう、な、なぜ乳房を……。あああん」  
 なんとか方向を修正しようとするのだが、

「伊部草さんが可愛すぎるから、かな」

「ちが……。っう、女に、母性を求めて……。ンああ」

体内の自分だけが分かる箇所に、濃い水気が湧いたのを覚えあわてて股を閉じる。けれど遅かった。太ももの奥でじわあっと熱いエキスが染み出し、下着を濡らしていく。

本に従い睦月が身体を起こす。

すでにマキナは本の内容など、このあと正常位でつながることさえ頭から飛んでいたが、本能的に股を開いていた。少年は白い脚の付け根へ腰を乗せ、結合の格好を作る。

大きく開脚すると、チューブスカートは勝手にめくれ、落書きが目立つショーツがあらわになった。

「入れるよ」

本の中の通りにつぶやき、のしかかかっていく睦月。黒い楕円形のペン跡が残るクロッチへ、猛々しく硬直した中身を伝えるズボンの膨らみを宛てがう。

少女は控えめにコクンと首を縦にふる。……「ええ、あなたが欲しいわ」と言って返す場面なのだが。本のことは頭から飛んでいた。

だらしなく弛緩した腿の付け根へ、ズボンごしのでっぱりが触れる。

それだけで少女は、つーんと背筋を弓なりにした。両手はすがるものを求めて自然とショーツを握る。張る形になった胸で、くたくたになるまで揉まれた乳房が強調され、着衣に浮きでる突起が少年にさらされる。

「あ、えっと。『これでお前は俺の女だ』」

「んっ、んん……。うあああ」

たゆんだゆん上下する双乳を、乳首の盛り上がりを目で追いながら、少年は律儀に本読みを続ける。

少女のほうにそんな余裕はなかった。挿入こそしていなくても、硬いズボンの膨らみは、すっかり充血させられたクレパスの中へ、ショーツごとめり込んでいる。切なそうに眉をたわめて、鼻を甘く鳴らすくらいのお返しかできなかった。

なおも本に従って、射抜いたつもりでぐらぐら揺さぶりをかけてくる睦月。

淫靡な摩擦に応じるように、ショーツの中身はみるみる隆起して、ズボンに密着するよくな反応を起こす。ここにペニスをくるまれたらどれだけ気持ちいいか……。睦月はゾクゾクしながら、仰向けの身体を抱きすくめた。

いかにも女の子の子女の子したマキナの肢体は、とにかく抱き心地が抜群なのだ。肌は吸いつくようにしっとりして柔らかい。皮膚がたえず甘い体臭で満ちて、体温が上がっていると汗混じりの妖しい淫臭に変わる。少し大きすぎる胸の膨らみがぐいぐいとバネのように反発してくる感触も心地よかった。

「ふじ……たつ、くん。藤田君……」

「うん？」

「い、いまは授業中……。あまり、動いては、あああ」

「あはは、ゴメンなさい先生。でもこれは本の通りだよ？」

川魚の腹に包丁を通すように、ふっくらした柔唇のあいだをぐりぐり射抜きながら言う。涙目になったマキナは、条件反射に近い感覚でのしかかる少年の背に両手を回していた。偶然にもつながったまま抱きあうという、本の内容を踏襲する。

「じゃあ……ねえ先生。知りたいな、男に抱きついたとき、女はどんな気持ちなの？」

「う……？」

「女性側の心情が問題に出るかもしれないよ。どんな気持ちで抱きついてるの？」

「……」

寸止めセックスで気が大きくなったのだろう。にんまり笑っている睦月。あまりに恥ずかしいことを聞かれて少女は真っ赤だが、その耳元へ唇を寄せると、

「ちなみに僕は、伊部草さんが可愛くて可愛くて仕方ないから抱きしめてる」

耳朶から頬へ、唇へとキスの雨を降らせた。

身体を中心へ、射抜かれる直前の快楽を流し込まれながら、愛撫で頭までぼーっとさせられて。マキナは困った表情も保てない。少しのあいだ下唇を噛んでいただけで、やがて自分から口をあけると、

「……お、女も、同じ」

ぎゅっとしがみつくと力を強めた。

「女も藤田く……男が、す、……好き、だから、抱きついて……る」

それまでそらしがちだった目をまっすぐに見合わせた。攻めている睦月がドキリと氣おされるくらい真摯で、そして愛くるしいまなざしで。

「……好き」

そんな言葉を最後に、今度は自分からキスをしかけ、

「~~~~っつ！ ……っ…、…っ」

先ほどの小さなものとは桁がちがう、熱烈な身悶えを起こし始めた。

ガクンガクンと全身を砕けてしまいそうにふるわせ、淫靡なすすり泣きをこぼすマキナ。見ていて睦月もズボンの中で噴射してしまいそうなほど妖しい姿だった。

やがて力の抜けた肢体が、くてんとベッドに崩れ落ちる。

(……地獄だ。僕には)

少年は小さくため息をつき、ぼりぼりと鼻の頭をかいた。

△ ブレイクタイム おやつ時間 ▽

立て続けに二度イカされたマキナと、まだ肝心なところにはまるで刺激を得られない睦月。どちらも別の意味で息が荒く、しばし寝転んで休憩になる。

少女はぐったりだが、まだ満足できていない少年の復活は早かった。後戯のかわりにと

白い頬や首筋へ唇を這わせながら。

「それで伊部草さ……先生？ 次はどうするの？」

「んう……、つ、次、は」

皮膚が高ぶっていて軽いキスでも感じてしまうのだろう。家庭教師はくすぐったそうにしながら、安心して紺褐色に濁っていた瞳をパチパチさせる。

「主要科目は終わったので、少し休憩。そのあと復習に移る」

「はあい」

「できればティーカップを貸して欲しい」

持ってきたらしい。バッグから缶入りの紅茶葉と、ハチミツを取り出した。

「お茶にするの？ いいけど、そのハチミツは？」

「糖分を補給する。これなら手早く消化できて胃に血液を取られず最適」

「ふーん」

「……うあの」

「こぼれちゃうよ。ちょっと黙って」

クスクスと笑いながら少年は、手にしたハチミツのボトルを置き、「お願い」と目を閉じて軽く顎を突き出した。

唇を一文字につぐんでいる少女は、しばらく逡巡するものの、やがて潤んだ目を細めな

がら求めに応じた。小さく鼻を鳴らして自分からも顎を突き出し……、黄金の糖蜜が絡む舌で、そんな彼の口唇を割る。

睦月は送られてきた舌をついばみ、遠慮なくそこに乗った強い花の香りを吸いとった。おまけでついてくる伊部草マキナの体臭も合わせてコクンと飲み干す。

「あは、美味し♪」

「藤田君……、こ、これはちよつと」

「どうして？ 糖分補給だよ」

おかわりをとまたハチミツのボトルを少女の口元へ持つていく睦月。休憩内容まではミカに口を出されていないため、自分で考えたことまでこんな展開にされるとは。マキナは恥ずかしそうに頭を垂れている。けれど、

「いやだった？ こういうの」

自信ありげな少年が、まっすぐに見つめて聞くと。

「……………」

わずかな躊躇。

「……………」

自分からボトルの口へと吸いついた。乳飲み子のようにちゅーちゅーとめいっばいまで啜り、少し頬を膨らせた、拗ねたような顔で、

「うわっぷっ」

口移しで彼に注ぎ込んだ。

ガムシロップや水あめにはない、ハチミツ特有の野生的な強い匂いが二人を酔わせる。ニククニククとぶつけ、絡めあう舌使いが、お互いに激しく、乱暴になっていった。

一度目とちがつて量が多いので、いつまで経っても味はほとんど薄れない。そのぶんいつまでも唇を離そうとしない二人。ときおり少年の発達の薄い喉仏がこくりと動くが、飲んでる量より、自然と分泌される唾液のほうが多そうだ。

離れるころには、どちらも鼻腔がハチミツ漬けになってクラクラになっている。お互いに目じりは腫れぼったいくらい潤み、淫欲に支配されていて……。

——ぶちやあ。

睦月は迷わず、ボトルを傾けて、彼女の胸元へ蜜を垂らした。

「……………」

マキナもそれを攻めることはなく。むしろ歓迎するようにぱつんとシャツのボタンを外してみせた。留めるものがなくなると、瑞々しい張りに満ちたバストは大きく弾みながらまろび出る。

睦月の手にはあまるサイズなのに、綺麗な球形を描くお碗形の乳房。先端では流麗なラインを崩す突起が、むっちり飛び出して自己主張していた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**